

博物館学資料「鶴田文庫」の整理・分類とその成果

浜田 弘明

キーワード：博物館学、博物館資料、資料分類、鶴田総一郎、鶴田文庫

1. はじめに

博物館学は古くて新しい学問である。日本に「博物館」という言葉が誕生しておよそ150年となる。幕末期に、幕府遣欧使節団の報告書に訳語の一つとして登場し、福沢諭吉の名著『西洋事情』によって、明治初期、日本に「博物館」の用語が定着した。そして、1872（明治5）年には、東京国立博物館の前身となる「博物館」が東京・湯島に誕生した。しかし、「学」として博物館を本格的に研究するようになったのは、その後100年近くを経たからのことである。

その間の1928（昭和3）年、現在の日本博物館協会の前身となる博物館事業促進会が発足し、専門雑誌『博物館研究』が創刊され、日本にも博物館研究の兆しがようやく現れた。その2年後の1930（昭和5）年には、東京教育博物館（現国立科学博物館）の館長などを勤めた棚橋源太郎（以下、棚橋）は、『眼に訴へる教育機関』⁽¹⁾という本を著し、博物館学の基礎がようやく形作られることとなる。「眼に訴へる教育機関」とは、まさに博物館のことであり、その専門書であったが、当時「博物館学」という言葉は、まだ用いられることはなかった。

「博物館学」を冠した専門書が初めて登場するのは、第二次大戦後の1950（昭和25）年のことで、先の棚橋が著した『博物館学綱要』⁽²⁾である。博物館法が公布される前年のことであった。翌年12月に博物館法が施行され、博物館に専門的職員として学芸員が置かれることとなり、大学でこの国家資格を養成する制度が確立し、大学での博物館学教育が始まった。しかし当時、テキストとすべき専門書というと棚橋のものが唯一であったため、日本博物館協会では、学芸員養成のための博物館学テキストの制作に取り掛かった。

1956（昭和31）年1月に、本格的な学芸員養成テキストとして、日本博物館協会から『博物館学入門』⁽³⁾が刊行された。そのテキストの半分を占める「博物館学総論」を著したのが、国立自然教育園（現国立科学博物館附属自然教育園）次長を勤めていた鶴田総一郎（以下、鶴田）であった。この中で鶴田は、博物館の基本的構成要素を「もの・ひと・ところ

(ば)」とし、基本的機能を「資料収集・整理保管・調査研究・教育普及」の4つとした。この考え方は、今日もなお日本の博物館学の基礎となっているものである。

その後、1970年代に入り、博物館学の専門書が相次いで刊行されるようになり、1973（昭和48）年に、ようやく全日本博物館学会（以下、博物館学会）が発足するに至った。博物館という日本語が誕生して、100年以上を経てからのことであった。博物館そのものの歴史は古いものの、学会が誕生してまだ40年にも満たない博物館学自体は、新しい学問と言えよう。また今日においても、博物館学会の会員数は400名あまりと、他の学会に比較すると小規模な学会と言わざるを得ず、博物館学はまだ社会的認知度の低い学問である。

その一方、今日、全国で学芸員を養成する大学は345校を数え、学芸員資格取得者も年間1万人を超える⁽⁴⁾が、その多くの養成課程では、考古学や美術を専門とする教員が兼任の形で博物館学教育に携わっているのが現状である。そのため、純粋な博物館学研究者の絶対数は少なく、博物館学を専攻できる大学も稀なのが現実である。こうしたことは、2006（平成18）年まで、文部科学省科学研究費（以下、科研費）の専門領域にも、博物館学という科目が存在しなかったという事実からも理解できる。

しかしながら、博物館学会等の働きかけがようやく実り、2007（平成19）年から時限付きながら科研費の分科細目に博物館学が置かれることとなった。幸い筆者は、その初年度に博物館学領域で申請した「博物館学資料『鶴田文庫』の整理・分類と公開に関する研究」が、採択（基盤研究（C）課題番号19611008）となった。本報告は、その3年間にわたる研究成果の一部を報告するものである。

この研究テーマにある「鶴田文庫」は、桜美林大学が所蔵する鶴田総一郎旧蔵の博物館学資料で、これを整理・分類することは、戦後日本の博物館学の展開・発展過程を研究する上で、重要な基本資料になるものと考えている。科研費による研究成果は、すでに研究成果報告書にまとめている⁽⁵⁾が、ここでは、その研究経過とその後の若干の研究成果を著すこととしたい。

2. 鶴田総一郎と「鶴田文庫」について

(1) 博物館学研究者・鶴田総一郎について

鶴田総一郎は、戦後初の学芸員養成用テキストとして編集された、1956（昭和31）年1月刊行の日本博物館協会編『博物館学入門』の「博物館学総論」の著者として知られ、平成初期に至るまで永年にわたり博物館学研究の第一人者として活躍した。

鶴田は、長年勤務した国立科学博物館を事業部長で退職し、1978（昭和53）年4月から1988（昭和63）年3月までの10年間、法政大学で初代の博物館学専任教授として勤務した。筆者は、その時代に鶴田から博物館学を教授された一人である。法政大学定年後は、中国の復旦大学において、博物館学部の顧問教授として引き続き活躍されたが、残念ながら、病気により1992（平成4）年2月に73歳で逝去された。

鶴田は、大学で生物学(とくに動物学)を専攻していたこともあって、敗戦直後の1945(昭和20)年11月、自ら志願して、当時の文部省科学教育課に奉職し、その後、現場の国立自然教育園(後に国立科学博物館附属自然教育園)、国立科学博物館に勤務し、30年以上にわたり日本の科学教育及び博物館の振興に尽くした⁶⁾。その一方で、博物館学の進展にも尽力し、先の『博物館学入門』刊行以前の1952(昭和27)年に開催された「第一回文部省学芸員講習会」では、34歳の若さですでに植物園に関する講師を務めている。また1973(昭和48)年に発足した全日本博物館学会の創設に関わり、委員として永く学会に寄与するとともに、ユネスコの国際博物館会議(ICOM)の場においても活躍し、日本人としては初の国際博物館学会第一副議長という要職も務めた。

(2) 「鶴田文庫」の概要について

改めて言うまでもないが、鶴田博物館学は戦後日本の博物館学の根幹を成すもので、現在もさまざまな博物館学のテキストで紹介されている、資料収集・整理保管・調査研究・教育普及の4つの基本的機能や、もの・ところ(ば)・ひとの3つの基本的要素についての考え方は、鶴田の「博物館学総論」の理論に基づくものである。このような経緯から見ても分かるように、鶴田の蔵書・資料には、昭和戦後期すべてにわたる日本の博物館学文献が含まれている。さらには、国内唯一と見られる海外文献も相当数含まれており、国内屈指の海外博物館及び博物館学関連文献が所蔵されているのである。

鶴田逝去後の、1992(平成4)年9月から12月にかけて数度にわたり、筆者は鶴田宅を訪れ、奥様の了解の下、2階全室にまたがる書斎・図書室の資料調査を実施した。自宅スチール製書架は44架に及び、図書のみならず、執筆半ばの手書き原稿類や、鶴田宛の文書・書簡類のほか、写真・ビデオ・図面・パンフレット、さらには「もの」として、国内外の昆虫標本や民族資料等があることを確認した。

これらの資料は、ご遺族のご厚意により、一括してご寄贈頂けることとなり、その後、受入れ先や搬出方法等についての協議を進め、1993(平成5)年1月、最終的に鶴田が勤めていた、法政大学博物館学研究室(後任・段木一行教授)に「鶴田文庫」(以下「文庫」)として移管することが決まり、段ボール箱に詰めての運搬作業が行われた。ちょうどそのころ、在学生・卒業生を中心に法政大学博物館学研究会が結成され、細々ながら、有志により「文庫」の整理作業を進めるとともに、「鶴田文庫勉強会」を並行して開催した。

しかしながら、2002(平成14)年3月に鶴田の後任であった段木教授が退職されたことと、法政大学の学部改組準備等に伴い、「文庫」を保管するスペースの確保が難しくなり、他所に再移管する必要が生じた。同年12月、当初から「文庫」の受入れ実務に携わってきた筆者の勤務校である、桜美林大学図書館が新たな受入れ先として決定し、2003(平成15)年2月、鶴田家から正式な寄贈申入れを受け、同年3月に搬入された。

その後、段ボール箱に入ったままの状態でも長期間保管することは望ましくないと考え、図書館予算によりプラスチック製のかごを購入し、順序性は崩さぬまま、資料の詰め替え

を行った。さらに、学内予算を活用しながら、徐々に整理作業も進めた。

早い時期の文庫公開が、多くの博物館学研究者から望まれていたが、人手及び予算上等の学内の事情により、資料整理は遅々として進まないことから、平成19年度科研費に時限付きながら新設された、「博物館学」の領域での応募に至ったのである。

3. 「文庫」研究の目的と方法

(1) 研究の目的

「文庫」は、ダンボール箱に換算して250箱を超える膨大な量の蔵書・資料群であり、科研費による3年間ですべての資料を整理・分類し、目録化することは到底不可能である。そこで、最も公開が望まれている、国内外の「書籍」に重点を当て、目録化を実現し、日本における戦後博物館学の発展過程を国内外の専門書から展観することを計画した。

先にも述べたように、「文庫」には、昭和戦後期すべてにわたる日本の博物館学文献が含まれ、さらには国内屈指の海外博物館学関連文献が所蔵されている。

これまでの博物館学研究において、博物館そのものの歴史研究については、体系的なものとして、椎名仙卓の『日本博物館発達史』（1988）、『図解博物館史』（1993）、『日本博物館成立史』（2005）及び、金山喜昭の『日本の博物館史』（2001）などがある⁽⁷⁾が、博物館「学史」に関する体系的研究はほとんどない。

また、博物館学研究者に関する個人史的研究事例はさらに少なく、単行本としては、博物館学の祖と言われている棚橋源太郎について記した、宮崎惇の『棚橋源太郎』（1992）が唯一で、鶴田総一郎に関しては、拙稿の「鶴田総一郎と日本博物館学」（1997）が唯一というのが現状である⁽⁸⁾。

このため、本「文庫」の整理及び研究の結果として、本邦初の戦後日本博物館学発達史が展観できることが期待できるとともに、博物館学研究者の個人史研究に関する方法論についても確立化への期待ができ、日本の博物館学の進展に寄与する部分は大きいと考えた。

(2) 研究の方法

本研究に先立ち、筆者らは、法政大学で行っていた「鶴田文庫勉強会」のメンバーを中心に、2002（平成14）年度から「文庫」に関する任意の研究会として「鶴田文庫研究会」を立ち上げた。事務局は、桜美林大学の筆者研究室に置き、年数回の会合・研究会を開催し、本「文庫」の整理・分類方法について検討を進めてきた。また、並行して戦後の日本博物館学に及ぼした「鶴田博物館学」の影響力等についても検証を進めて行った。

研究会のメンバーは、筆者のほか、金子淳（静岡大学准教授）、犬塚康博（元名古屋市博物館学芸員）、横山恵美（豊島区立郷土資料館学芸員）、森本いずみ（塩の道資料館専門調査員）、平松左枝子（元くにたち郷土文化館学芸員）、清水周（国立市教育委員会学芸員）、橋場万里子（パルテノン多摩学芸員）らがいる。今回の科研費による研究においては、筆

者が研究代表者となり、金子を共同研究者（のち連携研究者）、上記の他の6名を研究協力者として位置づけた。

この中で、平松・清水・橋場の3名は、資料整理実務に精通していることから「文庫」の整理・分類法の実務的研究及び「博物館学総論」の検証に参画し、犬塚・金子・森本の3名は、博物館学を専門とする立場から「鶴田博物館学」と戦後日本博物館学の史的検証に参画、横山は鶴田の教え子であることから、鶴田の人物像等の周辺研究について参画した。

科研費研究初年度（2007年度）は、膨大な量の「文庫」の中で、まず目録化に着手すべき書籍の対象を選定するとともに、その整理・分類法の検討に取り掛かった。まず、プラスチック製のかごに収めている「文庫」資料から、順序性を崩さぬよう、書籍のみをより分け、人海戦術により目録化作業を推進した（写真1・2）。また、鶴田の人物史研究についても並行して進め、基本資料として鶴田自身の著作目録、年譜等の作成を進めた。

2年次目（2008年度）は、引き続き書籍資料の目録化に重点を置き、人海戦術によって目録カード化作業を推進した。さらにカード化された資料については、パソコンにデータ入力し、データベース化を進めた。なお、分類体系については、普遍性を持たせるために、引き続き、他研究機関等における類似資料の整理・分類例などについて調査⁽⁹⁾を実施した。

また、時間的に可能な限り、書籍以外のパンフレット資料等についても、プラスチック製かごに入っている状態の資料を、前後関係を崩さないように留意しながら抜き出し、目録カード化する作業を推進した。これらの作業と並行して、戦後博物館学史の時系列的検討や、鶴田の著作目録をもとにした人物史的研究等について、年度末に研究会等も開催しつつ、まとめに向けての論議を展開した。

3年次目（最終年度、2009年度）は、前年度から継続して、カード化された全書籍をパソコンにデータ入力をしつつ、独自の資料分類体系によるコード入力作業も進めた。なお、分類体系については、普遍性・一般性を重視し、日本図書十進分類をベースに最終的な仕上げを行った。これらの作業と並行して、10月に研究会等を開催し、資料分類方法の最終的な確認や各自の原稿内容の調整等を行い、報告書の刊行に向かった。なお、報告書は、論文を主とする「解説編」と、書籍目録を主とする「目録編」の2分冊とした。



写真1 鶴田文庫収蔵状況



写真2 目録化・データ化作業

4. 「文庫」研究の成果

(1) 「鶴田文庫」の目録・公開化作業

書籍の整理については、科研費の期間内において、すべてを完了することは叶わなかったが、最終的に「文庫」の8割以上の目録カード化を終えることが出来た。この作業と並行して、パソコン入力作業を進め、全カード約13,000点の書籍のデータベース化を進めるとともに、目録刊行に向けての図書分類作業を進めた。

整理に当たっては、分類記号・整理番号・書名・著者名・出版地・出版年・ページ数・大きさ・注記・備考の各項目を記録化（カード化）した後、パソコン（エクセル）によりデータベース化を図った。このうち、「目録編」では、分類記号・書名・著者名・出版地・出版年・ページ数・サイズ（大きさ）・整理番号について、この順で掲載した⁽¹⁰⁾。

分類記号は、不十分ながら、出来得る範囲内で日本図書十進分類によった。資料の性格上、博物館に関する書籍については、後述のとおり一部独自分類を加え、可能な限り枝番まで分類した。サイズ（大きさ）は、縦×横を計測し単位はcmとした。整理番号は、「鶴田文庫」固有の配列順を重視した番号を付している。

「目録編」では、掲載順序を「和書」「洋書」の順とした。「和書」については、日本図書十進分類の番号順に掲載し、同分類番号のものは著者名を五十音順に配列した。「洋書」については、まず言語分類を行い、言語別に掲載し、その中を和書と同様、日本図書十進分類の番号順に配列し、同分類番号のものは著者名をアルファベット順とした。そして最終的に、2010（平成22）年3月『報告書（目録編）』⁽¹¹⁾として刊行することが出来た。

整理を終えた国内文献の「和書」は約7,300点に達し、内容は1950年代から80年代に至る博物館・文化財・社会教育関係のものが中心となっている。海外文献の「洋書」は約5,700点、16ヶ国語以上に及び、博物館と博物館学に関するものが多くを占めている。

これらは、2008（平成18）年12月、桜美林大学内に整備された「桜美林資料展示室」の一部を利用して「鶴田文庫コーナー」を開設（写真3・4）し、整理済み書籍の公開を開始した。配架は、原資料配列を重視した番号配列とし、各書籍には、目録上、分類検索のために図書分類番号も付している。

さらに翌2009年3月には、「文庫コーナー」の学外研究者への公開を兼ね、桜美林大学内において鶴田文庫研究に関する「公開研究会」を開催した。

これらの作業を経て、鶴田博物館学の再検討を行い、鶴田博物館学を軸とした戦後日本博物館学の研究及び、博物館学研究者・鶴田総一郎の個人史研究に関して、2010（平成22）年3月に『報告書（解説編）』⁽¹²⁾としてまとめることが出来た。



写真3 桜美林資料展示室



写真4 鶴田文庫コーナー

(2) 鶴田総一郎の著作

鶴田自身の著作物は、所蔵資料から138件が確認され、「著作目録」としてまとめた⁽¹³⁾。鶴田の各年代別著作件数は、次のとおりである。

1949～1960	42件	1971～1980	46件
1961～1970	28件	1981～1991	21件(不明 1件)

内容は、博物館・博物館学に関わるもののみならず、もともとの専門の動物学関係のものも少なくない。確認された著作物で最も初期のものは、1949(昭和24)年の『文部時報』863号に執筆された「国立自然教育園」である。

初期の著作は、国立自然教育園勤務当時のもので、1950年代前半にかけては、自然教育園の普及に努めるとともに、全国の自然博物館の発掘に力を注いでいる。ことに、月刊誌『社会教育』において、「新しい博物館」を連載しているのが目を引く。また、日本博物館協会の刊行物に、「博物館に関する二、三の私見」(『会報』18、1952)、「学芸員の資格等に関する行政上の諸問題について」(『博物館研究』1-4・5、1954)を寄稿していて、博物館学を意識し始めた時期の論考と言えるものがある。

1950年代中盤から1960年代前半にかけては、動物学・昆虫学関係の著作とともに、理科教育の振興に関わる著作が目立ち、理科教育と科学系博物館との橋渡しに関心を持つ時期と言える。1956(昭和31)年に日本博物館協会編の『博物館学入門』が刊行されるが、その後は、『動物分類学』『昆虫学』(岩崎書店、1958)といった専門書から、「小鳥と子供と巣箱」(『東京だより』58、1956)、「目で見る採集と工作の事典」(『小学五年生』8月号付録、1957)のような子ども向けのものまで、幅広い動物学関連の著作を著している。一方で、1957(昭和32)年には、日本博物館協会で「地域社会と博物館との結びつきに関する実態調査」を行い、その報告も行っている。また、1958～59(昭和33～34)年には、7ヶ月間にわたる欧米博物館研究の旅に出かけ、1959～60(昭和34～35)年に教育活動を中心とした、その報告を『博物館研究』に連載している。この旅が、鶴田が

博物館についての国際的視野を広げる大きなきっかけになったものと思われる。

1959(昭和34)年には、「博物館の最低基準に関する一考察」(『博物館研究』32-9)として、「遊園地と博物館との境目について」の副題を付した少し変わった論考を発表している。1960年代からは職責とも関わり、ICOM(国際博物館会議)や博物館のあり方に関する著作が増える。最も博物館学に関わる論考を活発に発表した時期であるとともに、博物館の専門家として委員に携わった、東京都への「高尾自然科学館」移管や、「東京百年記念博物館」建設に関わる著作も見られる。

1970年代に入ると、国立科学博物館事業部長という管理職、さらには博物館学を教授するという立場から、学芸員論や博物館の定義付けについての言及が目立ってくる。1970年代前半は、「博物館学芸員の専門性について」(『月刊 社会教育』15-11、1971)や「専門的職務は何か：博物館学芸員」(『日本の社会教育』18、1974)に見るように、学芸員の専門性への言及が目立つ。1970年代の後半を迎えると、大学での学芸員養成の立場から「学芸員を目指す人々のために」(『博物館研究』10-6、1975)や「学芸員養成上の問題点について」(『法政大学文学部紀要』26、1981)のように学芸員養成論への言及が目立ってくる。また、法政大学着任前後に当たるこの時期は、『世界博物館事典』(講談社、1979)、『博物館学講座』(雄山閣出版、1979～80)の編集に力を入れるとともに、「博物館定義の変遷」(『博物館研究』10-5、1975)や「博物館理論の到達点」(『講座・現代社会教育IV』亜紀書房、1977)の著述に見られるように、博物館や博物館学の本質論を問うものを著している。

しかし、その後の1980年代は、法政大学の博物館学教授をしている時期であるが、日本の博物館・博物館学事情を憂いてか、本質論的著作は減り、海外事情の紹介にとどまるものが増えてくる。「郷土博物館の今日的意義と役割」(『社会教育』39-5、1984)を除くと、当時の著作は、委員を務めていたICOMの大会出席報告や1984～85(昭和59～60)年のイギリス留学報告が中心となっている。そして、法政大学を定年となった1988(昭和63)年からは、中国に渡ることとなる。

遺稿ともいえる著作が、亡くなる前年の1991(平成3)年に著された「『博物館学入門』の「博物館学総論」篇を執筆した経緯」⁽¹⁴⁾である。これにより、鶴田の博物館学に寄せる思いが初めて明らかにされたのである。

(3)「鶴田文庫」の内訳と分類

本研究で完了できた「文庫」の書籍資料の目録化点数は12,982点で、和書が56%(7,290点)、洋書が44%(5,692点)を占める。本「文庫」の一つの特色である洋書のうち、85%は英語文献が占めるが、言語は16以上に及んでいて、その内訳は次のとおりである。

a. 和書：7,290 点		スウェーデン語	8 点
b. 洋書：5,692 点		ノルウェー語	8 点
英語	4,857 点	オランダ語	6 点
中国語	169 点	チェコ語	6 点
フランス語	144 点	スロバキア語	6 点
ドイツ語	167 点	デンマーク語	2 点
スペイン語	56 点	ハンガリー語	1 点
ロシア語	52 点	ルーマニア語	1 点
イタリア語	35 点	不明・その他言語	165 点
ポルトガル語	9 点		

冊数の多い和書と英文書籍については、目録掲載に当たり図書分類を加えた。日本図書十進分類⁽¹⁵⁾を基本とした本文庫の独自分類は、次のとおりである。

000 総記	.9 博物館収集品目録・図録
051 逐次刊行物（紀要・年報等）	.10 博物館教育
061 学術・研究機関	100 哲学・宗教
069 博物館・博物館学	200 歴史・地理・地誌
.1 博物館行財政・法令	300 社会科学・教育学
.2 博物館建築・設備	400 自然科学・生物学
.3 博物館管理・博物館職員	500 技術・工学・生活科学
.4 資料の収集・整理・保管	600 産業
.5 資料の展示・利用・宣伝	700 芸術・美術・文化・文化財
.6 一般博物館	800 言語
.7 学校博物館	900 文学
.8 専門博物館	

069 の分類のうち、1 から 9 までは、図書分類をそのまま利用したが、現行の分類では、近年活発な刊行が見られる「博物館教育」という項目がないため、5 と別に、10 としてこれを設けた。

本「文庫」は、069 に分類される書籍が多いのはもちろんであるが、051 に分類される学会誌等の定期刊行物、300 番台に分類される社会教育・行政関連の図書も目立つ。鶴田

の専門は博物館学研究ではあるが、科学教育や社会教育全般にも明るいことから、関連の委員も多数歴任しており、このような関連性が、所蔵の書籍にも反映されていると言える。

今後は、蔵書から、所蔵者の経歴や研究歴のみならず、人生観や人間性をも読み込む必要があるし、そのような人物史研究も必要と考える。

5. おわりに

2010(平成22)年度まで4年間にわたり、時限付きの分化細目に置かれてきた「博物館学」は、ようやく2011年度より正式な科学研究領域となり、分野は文化財学や地理学と並ぶ「総合領域」に分類され、分化及び細目はそのまま「博物館学」と決定した⁽¹⁶⁾。棚橋の『博物館学概論』が刊行されて61年、鶴田の「博物館学総論」刊行から55年を経て、ようやく正式な科学研究領域に認められることとなった。

そうした意味では、手前味噌ではあるが、本「文庫」を目録化し、戦後日本の博物館学の道のりを明らかにしてゆく作業は、時を得た研究であると考え。鶴田の執筆した、「博物館学総論」からすでに55年が経っているが、未だに鶴田博物館学を超える博物館学理論の登場はない。

この「文庫」をもとに、戦後における日本博物館学と鶴田博物館学の再評価を更に進め、新たな博物館理論の構築に向かうことが、今後の我々に課された課題と言えよう。そのため的基本的資料が、本研究によってようやく整ったと考える。

これまでの博物館学研究は、個々の博物館に関する研究や博物館活動のあり方に目を向けた実践的なものが中心となりがちで、残念ながら本質を問う理論的研究はそう多くはない。また、博物館の歴史的研究においても、博物館そのものを対象としたものが中心で、博物館学や博物館研究者に目を向けたものは極めて少ないと言えよう。

本研究では、「鶴田文庫」という博物館学資料群を手がかりに、鶴田総一郎という博物館学研究者が歩んだ足跡と、戦後、鶴田と歩んできたと言っても過言ではない、日本博物館学研究の歩みを振り返ってみた。日本の博物館学研究の基盤がそこに置かれ、今後どのように向かうべきかを考えるに当たり、本「文庫」を検証する中から得るものは少なくないはずである。

今回の科研費研究の中で、メンバーの金子⁽¹⁷⁾は、従来の博物館学の学説史研究では、「思想の形成過程を社会や経験などの諸状況と変数において読み解いていく」ことに「きわめて無自覚であった」と指摘している。さらに金子の言うように、「規範意識に裏打ちされた感覚的な『思いつき』で研究テーマを決め、先行研究を踏まえず、方法的にトレーニングもされないまま『研究』だけが行われ、これらの『研究成果』が、増える一方の媒体に発表され続けるという悪循環が生起」して行くことを反省しなくてはならない。

また、同じくメンバーの犬塚が言う⁽¹⁸⁾ように、「鶴田博物館論の経験史は、今後も検証されて」行かなければならないと考える。総じては、「鶴田文庫」研究の着地点として、

「鶴田博物館論とは何だったのか」そして、「日本の博物館とは何か」を問うことになる。

付記：本研究は、平成 19～21 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 課題番号 19611008 「博物館学資料『鶴田文庫』の整理・保存及び公開に関する調査・研究」の助成を受けたものである。

注

- (1) 棚橋源太郎 (1930) 『眼に訴へる教育機関』寶文館 (伊藤敏朗監修 (1990) 『博物館基本文献集』第 1 巻、大空社に所収)。
- (2) 棚橋源太郎 (1950) 『博物館学綱要』理想社 (伊藤敏朗監修 (1991) 『博物館基本文献集』第 13 巻、大空社に所収)。
- (3) 日本博物館協会 (1956) 『博物館学入門』理想社 (『博物館学総論』については、伊藤敏朗監修 (1991) 『博物館基本文献集』別巻、大空社に所収)。
- (4) 文部科学省における 2009 年の調査結果による。
- (5) 研究代表者 浜田弘明 (2010) 平成 19～21 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究成果報告書『博物館学資料「鶴田文庫」の整理・保存及び公開に関する調査研究』(解説編) (目録編)。本報告書は、全国の都道府県立図書館及び、全国大学博物館学講座協議会加盟校図書館で閲覧できるとともに、桜美林大学図書館ホームページにおいて PDF 版報告書を公開している。
- (6) 鶴田総一郎 (1991) 『『博物館学入門』の「博物館学総論」篇を執筆した経緯』(伊藤敏朗監修 (1991) 『博物館基本文献集』別巻、大空社)。
- (7) 椎名仙卓 (1988) 『日本博物館発達史』雄山閣、椎名仙卓 (1993) 『図解博物館史』雄山閣、椎名仙卓 (2005) 『日本博物館成立史』雄山閣、金山喜昭 (2001) 『日本の博物館史』慶友社。
- (8) 宮崎惇 (1992) 『棚橋源太郎』岐阜県博物館協会、拙稿 (1997) 「鶴田総一郎と日本博物館学」『学際研究』第 4 号、学際研究の会。
- (9) とくに、日本博物館協会旧蔵図書資料を所蔵する、常磐大学の水島英治・椎名英樹の両氏には、分類の検討にあたりご教示いただいた。
- (10) 詳細については、注 (5) 「解説編」 pp.6-12 参照。
- (11) 注 (5) に同じ。
- (12) 注 (5) に同じ。
- (13) 注 (5) 「解説編」 pp.76-79 参照。
- (14) 注 (6) に同じ。
- (15) 日本図書館協会 (1995) 『日本図書十進分類法 新訂 9 版』による。
- (16) 日本学術振興会 (2010) 『平成 23 年度科学研究費補助金公募要領』。
- (17) 金子淳 (2010) 「戦後日本の博物館学の系譜に関する一考察」注 (5) 文献 (解説編) p.62。
- (18) 犬塚康博 (2010) 「木場—鶴田博物館論の発生史的検討」注 (5) 文献 (解説編) p.68。